

## 第九回教化化学研究集会研究発表要旨

### 日本の社会教育は

#### これでよいか

青木泰秀

(和歌山県経王寺住職)

今日のテーマは大き過ぎて、ちよつと氣負つた感じですが、お題目総弘通運動とも大いに関連がありますので、しばらくご清聴をお願いします。

今日はあまり時間がありませんので結論から申しますと、現在のよゝな社会教育をやつていると、日本はあまり立派な国にはならないと思ひます。このことを心配して、ずっと以前から社会教育法を改正して、学校教育と肩を並べて行えるよゝな社会教育にしないとけなないと叫んできました。

一般には、学校教育と社会教育は、車の両輪だといふ人がいます。しかし、そんなことを考へている人は、教

育の本質についてあまり深く知らない人だと思ひます。これからの日本を良くするためには、家庭教育をふくめて社会教育が極めて重要なのですが、国自体がまだその重要性に氣がついていません。

その証拠に、社会教育の拠点ともいふべき公民館活動に關した法令の第二十七条に、「公民館は館長をおき、主事その他必要な職員をおくことができる」とあります。社会教育と学校教育とは、車の両輪のよゝな役目をもつということが正しいとして、いま仮に、この社会教育法の条文を学校教育法に当てはめてみると、どんなことになるのでしょうか。即ち「学校には校長をおき、教頭その他必要な職員をおくことができる」ということになります。

そうなるとう一般の人がこれをみてどんな感じになりますか。誰だつて、そんなバカなことがあるかときつと申すでしょう。校長をおくことができるということは、必ず

しもおかなくてもよいことなのです。国が口先きでは社会教育は必要だといながら、実際にはその必要性を認めていないので、こんな片手落ちなことになって  
いるのです。

日本ではいま「いじめ」や「非行」が、後を断ちません。それどころか、次第に年齢が低下しているのも事実です。ある団体の調べたところによりますと、非行の子  
のいる家庭の約八〇%が、仏壇や神棚がないそうです。

それは戦後、核家族が増えて、ご先祖を忘れる人が多くなつたためでしょう。その上、学校教育では宗教的なこととはタブー視して避けて通り、学科のつめ込み教育に専念してきたことも、非行を生む要因となっています。

さて、ここで教育行政上の社会教育の生いたちを理解するために、もう一度現行の学校教育法と社会教育法のかかりについて、考えてみたいと思います。

順序として、現行の社会教育の定義について申しますと、第二条に、「社会教育とは、学校教育法に基づき学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動(体育・

レクリエーション)となつています。この条文は一見して分るように、学校教育と社会教育の分野を明白に分けています。

即ち、学校教育を番外地において、一応それぞれの縄張りを決めたものといえましょう。もう一步進んでいえば、教育の本質とは別に、文部省は行政上の区別をしたということですが、このようなかたちで、日本の教育が政治の支配下に発展してきたのですが、これにはそれ相応の理由があり、明治初年の日本社会情勢から見て当然のことといえます。

ということとは、長い間の鎖国から解放された日本は、世界の学問の水準が分つてくるにつれて、大変なショックだったのです。そこで先進国の文明・文化を急いでとり入れる必要にせまられました。当時の庶民はこんな歌を唄いました。

じゃんぎり頭を叩いてみれば

文明開化の音がする

ちよんまげ頭を叩いてみれば

因循姑息の音がする

ハイカラというのも、この時分の言葉で、外国の文物がすべて立派に見えて、日本人の誰もが外国崇拜に傾いていきました。

さて、明治五年に文部省が創設され、同時に小学校の制度も始まり、これまでの寺小屋がなくなりました。義務教育を始めたということは、日本から文盲をなくすためでした。しかし、その頃から日本の教育は、そろそろ知識の偏重に傾いていったのです。また、徳川時代に寺小屋で育つた道徳教育が弱められたことも見逃してはなりません。

当時の社会生活の中で、美しい人間関係が育つていたことは、やはり孔孟の教えがその根底に根ざしていたからです。知識教育が優先するようになると共に、人間教育の流れをも大きく変えたと言えましょう。しかし、この流れを察知した明治天皇は、日本民族がうけ継いできた美風を守るために、教育に関する勅語を渙発しました。今では、この教育勅語も忘れられています。これは人間教育の素晴らしい基本で、世界のどこの国にもこんな教育理念はありません。

明治三十年代に入つて、義務教育も一応定着したので、その頃から一般社会人を対象として通俗的な教育 (adult education) が設けられ、これが日本の社会教育の始まりとなりました。

ここでは、読み書きソロバンは別として、行儀作法から趣味に至るまで幅広い講座をもつて、庶民教育をしました。そして、通俗教育が社会教育と改称されたのも、その頃です。正確には、大正八年に名実共に社会教育が発足した事になっています。ところが、長い間の慣例で、学校で習得することが本当の教育で、社会教育は任意的教育だというように思い込んでしまったのです。

しかし教育の本質は、何といつても人間づくりが目的でなければなりません。そして人間は、複数で幸せに生きるために教育が必要なのです。独りぼつちで生きていくなら、教育なんか要らないでしょう。好き気ままに生きていけばよいわけです。

本論にかえりますが、社会とは、二人以上の人間が集まって秩序ある生活をする場ですから、社会教育が必要なのです。厳密な意味では学校教育も社会教育の一部だ

といえます。だから、教育行政上の区別と教育の本質を混同してはなりません。

日本の学校教育の生いたちから考えると、学校教育が優先した事情は先きに述べた通りですが、そうだからといって、そのことが正しいとはいえません。近頃は大部分目覚めてきましたが、とにかく学校の成績にこだわって、点数がとれない子供は相手にされない時代もありました。落ちこぼれといってバカにされたのですが、本当は落ちこぼれなどはいないはずで、それは、学校教育が教科の点数本位だから、人間性に対しても誤って評価をするようになってしまったので、そのような考えが現代に至るまで、後遺症となって残っていることに気がつかねばなりません。

しかし、私がいかに大きい声で叫んでみても、国や学校の教師の目覚めがない限り、所詮は馬耳東風であつて、まことに残念なことです。エジソンやアインシュタインが、学校の生徒時代には決して優等生ではなかったということは、何を物語っているのでしょうか。

さて、何ごとによらず、将来を考える場合には、歴史

の方向を正しく見きわめることが必要です。そこで日本の将来を考えるうえで、日本がこれまでに歩んできた歴史に焦点を合わせてみることにしましょう。

それによると、日本は四十年毎に大きな社会変革を経て、今日に至つていられるといわれます。このお話の冒頭でも述べましたように、日本の夜明けは「黒船来る」から始まり、鎖国より開国に踏み切つたときから、新しい日本が生まれました。それは一八六五年、徳川幕府が終つた時です。それから日本は遮二無二外国から学術文化をとり入れ、外国に追いつくことに一生懸命でした。

その結果、国力も大いに充実し、富国強兵をモットーに国全体が向上発展しました。当時、日本の近海に良港を求めて満州を南下してきたロシアは、東洋に勢力を伸ばして遂に日本との一大決戦となり、日露戦争が起りました。そして、日本が陸海軍共に大勝しました。乃木大将や東郷元帥が軍神と謳われたのです。それが一九〇五年でした。やがて世界の一等国にのし上つた日本は、ドイツ・イタリアと三国同盟を結び、世界を相手に戦争をし、続いて日本は野望を遂げるため満州事変から日中

戦争へと発展し、遂に止まるところを知らず、老若男女をすべて戦争へと駆りたてました。当時の軍部の勢いは、言語に絶するものがありました。しかし驕る平家は久しからずとやらで、昭和二十年八月十五日、日本は遂に力尽きて世界中に土下座したのです。

日本は敗戦と同時に、すべてが骨抜きになったことはご承知の通りです。家族制度は崩壊し、日本固有の民族的美風もどこかに消えました。その後、貧乏のどん底に喘いだ日本は、世界の同情によって少しづつ自力を回復し、今では世界を風靡するような経済大国になりました。そして、今年が敗戦から四十年目です。

ところが、成り上った日本は、次第に謙虚な心を忘れてため、エコノミックアニマルと蔑視されながらも、経済的優位を誇っています。しかし、これ以上の傲慢は許されません。そこで政府は、行政や教育の改革が迫まらされているのです。この歴史的因縁から考えますと、世界から信頼され、愛される日本になるには、更に四十年の努力を要する勘定になります。計算通りいかないにしても、美しい日本を再現するためには、日本人の誰もが、

もう四十年ばかり頑張らねばなりません。これには日本人のすべてが国民的課題として、日本再建にとり組むべき宿命があると思うのです。

こうした社会情勢の中で、我々日蓮門下は、お題目総弘通を叫んでいるわけです。私たちはとかく、宗派意識が強くなるにつれて、視野が狭くなりがちですが、この歴史的必然の動向に立って、お題目総弘通運動を考えるべきではありませんか。

七百年の昔、宗祖は邪悪に汚染されていく日本を救うために、法華経の尊いことを説き、速やかに実乗の一善に帰せよと立正安国を叫ばれたのです。その一大決意が「われ日本の柱とならん。われ日本の眼目とならん。われ日本の大船とならん」という三大誓願になったのです。美しい日本を建設することは、日本人全体の責任です。従って、この大使命を果すために、陣頭に立つのは誰か。いうまでもなく、祖師の遺志をつぐ日蓮門下より外にありません。他宗門では、この日本を救うことはできないのです。祖国の存亡に対する考え方が、違うからです。これほどの大使命を前にして、私たちは単なる日常の年

中行事に日を費やしている時ではありません。今こそこの国民的課題を果すために、国民の先達となって総決起すべき時です。

もつと端的にいうならば、お題目総弘通は日蓮宗だけの専売ではないのです。社会教化するには、法華経以上の教えはないということを、全国民に周知徹底させなければなりません。

妙な例を申し上げて恐縮ですが、近頃エイズという恐しい病気が現れました。この病気はアフリカのサバンナ地方に発生して、フランスやアメリカに伝染し、今や世界中の恐怖になっています。キスしても感染するといふのですから、恐い病気です。現在では、適確な治療法もありません。日本では、各都道府県の知事に特別な権限を与えて、エイズの感染を防ぐ対策も講じているようです。

末法になると、生命の危険を感じるのですが、次々と起こってきます。ところが、それは偶然ではなく、そのことをちゃんと法華経は予言されています。譬喩品の中に、医学が進歩して病気が治るのはほんのツカの間で、その

あとから得体の知れない病気が発生して、人間を苦しめるとあります。譬喩品の中に説かれている様々な話は、単なる説話ではありません。三界火宅といつても抽象論ではなく、世界のどこかで戦争をしています。クーデターをやつて、黒いものでも白いという主張をしている現実です。

法華経をよく読むと、教育学(菓草喩品)から婦人解放(提婆品)に至るまで、現代人を指導するには最高の教えであることがわかります。宗学者流な、型にはまった解釈をしていたのでは、法華経の真価が認識されません。論語読みの論語知らずになつてはいけません。

近頃はよく活性化という言葉を用いますが我々が、お経を拝読するときは、どのようにして、この意味を他人に理解させるかが大切ではありませんか。この思いやりがあつてこそ、法華経の教えが生きてくるものと信じます。

最後にもう一度申し上げますが、世界は歴史的必然によつて動いているのです。これから更に四十年の間に、立派な日本の社会を造らねばなりません。宗祖は開目抄